

町史編さんだより

第19回

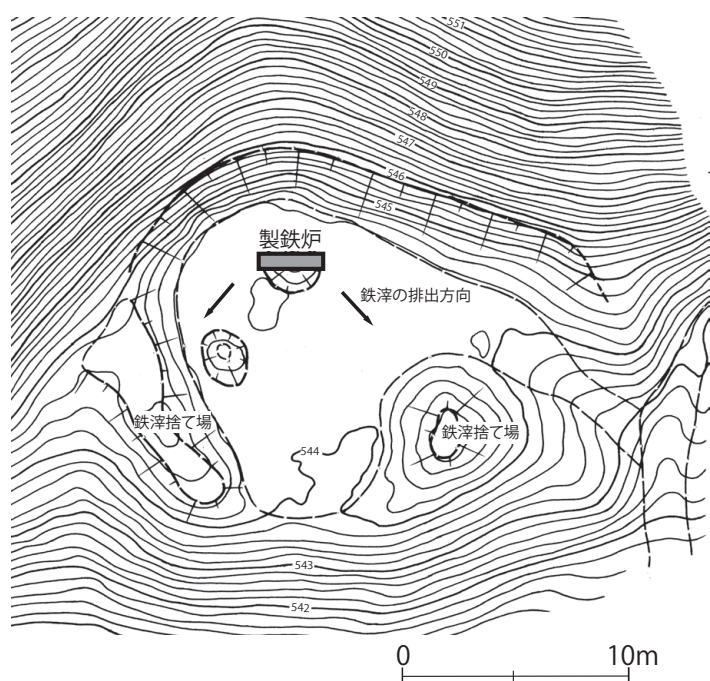
『江戸時代以前のたたら製鉄』～久住 川西・二部谷たたら測量調査から～

たたらで栄えた日野郡。その歴史は古代にさかのぼりますが、江戸時代以前のことは詳しくわかっていません。今回は、町史編さん事業に伴って、9月9・10日に測量調査を行った久住地区の中世「野だたら」を紹介します。

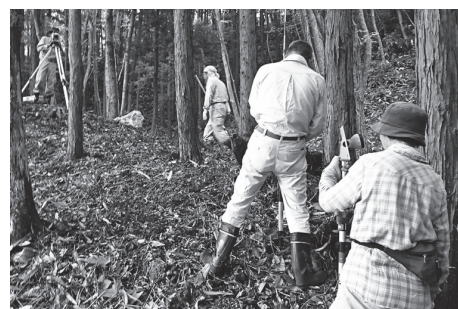
文：歴史・民俗・文化小委員会執筆委員 角田徳幸（古代出雲歴史博物館）

開墾されず当時の姿を残した貴重なもの

伯耆国たたら顕彰会の調査によれば、日野町には百ヶ所あまりのたたら製鉄遺跡があります。このうち江戸時代以前のたたら、いわゆる「野だたら」は六割を超えています。「野だたら」は、小規模であり未発見の遺跡もまだ相当あると考えられますので、実数はもっとも多いはず。久住の川西・二部谷たたらは、「野だたら」が開墾などによつ



▲川西・二部谷たたら測量図



▲伯耆町教育委員会の協力で測量を実施

て改変を受けることなく、廃棄された当時のままの状態が残っていたことから、町史編さん事業の資料とするため、測量調査を行いました。



▲鉄滓の捨て場

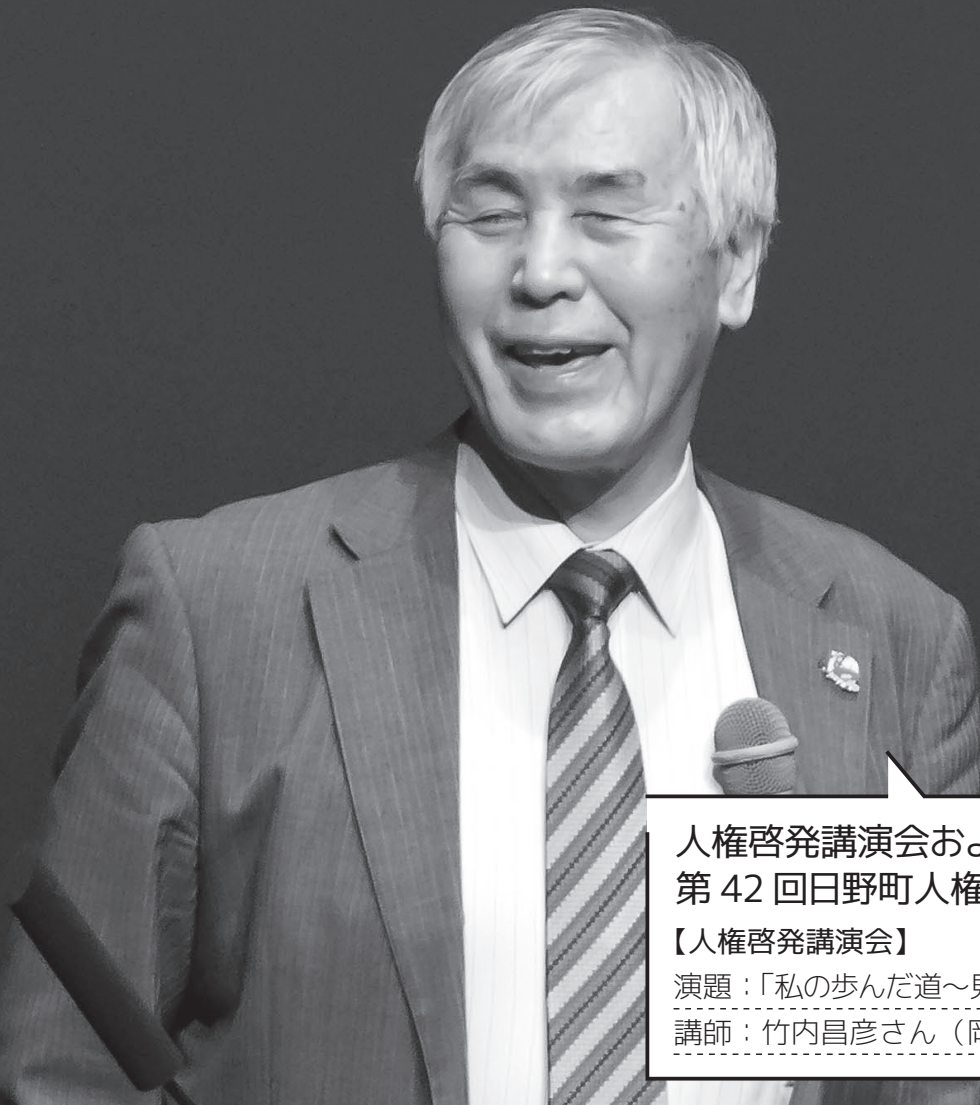
江戸時代のたたらは、中曾の都合山たたらなど、川に面した広い平坦面に設けられる場合が多いようです。これに対し、それ以前のたたらは、丘陵を削って斜面を埋めて造った小さな平坦面に営まれることが一般的です。川西・二部谷たたらも、急峻な斜面を削り、その土で造成した平坦面で製鉄を行っています。平坦面の広さは、現状で長さ20㍍・幅13㍍ほどありますが、これは操業の際に排出された鉄滓で斜面が埋められたことによるもので、本来は製鉄炉が設置できる程度の広さであったことでしょう。こ

のようなたたらを「野だたら」と呼ぶことが多いのですが、文字通り露天で製鉄が行われていたのかどうかは検討する必要があります。

鎌倉～室町時代の製鉄遺跡と推定

製鉄炉は、丘陵斜面に長辺が平行するように置かれます。鎌倉～室町時代頃の製鉄炉は、長さ200㍍～250㍍・幅40㍍～70㍍ほどであったことが分かっていますので、同様な製鉄炉が考えられます。製鉄作業では、鉄鉄のほかに鋼や鋳は作られました。操業中に排出される鉄滓は、谷側の斜面に捨てられましたが、製鉄炉の両小口に対応するように鉄滓の小山が二ヶ所に残っています。川西・二部谷たたらは、その状況から鎌倉～室町時代頃に営まれた製鉄遺跡と推定されます。保存状態が非常に良く、江戸時代以前、たたら製鉄が日野町においてどのように行われていたのかを示す好例といえます。

歩み続けること。
それは、生きること。



人権啓発講演会および
第42回日野町人権・同和教育研究集会
【人権啓発講演会】

演題：「私の歩んだ道～見えないから見えたもの～」
講師：竹内昌彦さん（岡山ライトハウス理事長）

theme 1
人権尊重の心をはぐくむ。
“人権啓発講演会”

「目が見えない」とは？
“心のゆとり”を持った
接し方が大切

10月6日、町文化センターで人権啓発講演会および第42回日野町人権・同和教育研究集会が開かれました。同講演会では、岡山ライトハウス理事長の竹内昌彦さんが、「私の歩んだ道～見えないから見えたもの～」と題し、講演を行いました。

竹内さんは、幼少期に全盲となり、いじめや障がい者差別、そして最愛の息子との別れなどを経験。そんな波乱の人生を歩む中で出会った自分を見守ってくれた家族や周りの人への思い。そしてどんな時も前向きに歩み続けることの大切さを紹介しました。

講演が始まると、「目が見えない」とはどういうことか分かりますかと会場を見渡した竹内さん。「誤解されがちだが、目が見えなくても食事や外出など普通の生活はできる。しかし、

私たちは初めて行く場所などでは慣れるまで時間がかかる。そこを一番分かっているほしい」「障がい者や高齢者と付き合う時はイライラせず、ゆっくり見守っていただける“心のゆとり”を持つてください」と呼びかけました。

また、目が不自由な竹内さんの日常を支える道具として、音声ガイド付きの時計や電卓などを紹介。以前にはなかった社会のやさしさを実感するようになったそうです。

一方で、「点字ブロックの上には自転車など障害物を置かないでほしい」「目が不自由な人と話すときは、声を出してほしい」など、普段目が見える生活を送っている私たちが見落としがちな点も指摘。実際に来場者と一緒に、目が不自由な人を誘導する際のポイントなども紹介しました。竹内さんは「子どもや高齢者など弱い立場の人と歩く時は、右側通行を意識してほ